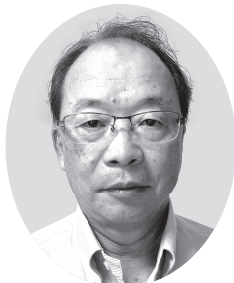


校長会広報222号

発行・一般財団法人 宮崎県校長会館
編集・宮崎県校長会
広報委員会



「新たな椎葉村型の教育」を進める！

椎葉村教育委員会 教育長 柚木和浩

椎葉村では、第2期椎葉村教育振興基本計画に則り、令和4年度から令和8年度までの5年間にわたる計画の中に、基本理念として「未来を切り拓く心豊かでたくましい椎葉の人づくり」を掲げている。その中で、「令和の日本型教育」を進めるために「個別最適な学び」と「協働的な学び」を日常的に実践している。ここでは、ICT等を有効に活用した学習や村民とつながる学びを行う「新たな椎葉村型教育」として、3つの重要施策を紹介する。

まず、魅力ある多様な教育の推進として、「椎葉村ユニット学習(SVUS)」という新しい学習スタイルを進めている。これは、村内の学校がタブレットパソコンでつながって学習する形態である。2校間で、ユニット(例えば、松尾小と大河内小、尾向小と不土野小、等)を組んだり全小学校5校間でユニットを組んだりしている。「椎葉村ユニット学習」のねらいは、「複式指導の部分的改善につなげること」、「同学年の子どもを増やすことで多様な考え方を共有できるようにすること」、「T1・T2以外の教師がきめ細かな個別指導ができるようにすること」の3つである。

次に、キャリア教育の推進として、「椎葉村学(ASL)」を令和5年度から開始する。そのために、令和4年度から準備にかかり、椎葉村学推進委員の先生方の熱意をもって、小3から中3までの学習過程を作り上げた。「椎葉村学」では、椎葉村に対する子どもたち自身の思いや願いを生涯にわたってもてるようにするために、子どもたちと地域住民とのふれあい活動をとおして、村に暮らす住民の思いや願いを受け止め、椎葉村での昔からの暮らしを丸ごと

理解できるようにする。このような活動をとおして、子どもたちが自分自身の中で、ふるさと椎葉村を見つめ直し、将来にわたって関わり続けようとする気概を培う場とした。「椎葉村学」は、総合的な学習の時間に位置付けていることから基本的に探究型の学習形態で行う。そして、子どもたちが生活する地域の「村民みんなが子どもたちの先生」を合言葉に本学習を進める。特に、キャリア教育に位置付けたのは、「椎葉村学」を中心とした地域と学校の連携・協働をイメージしたものにするためである。学校からの実践報告が楽しみだ。

最後に、特別支援教育の推進として、特別支援教育の視点を盛り込んだ校内の支援体制を充実させることや保育所、小学校、中学校が連携した切れ目のない支援体制を構築することを目指している。特に、不登校傾向の生徒への対策を前進させるものとして、令和5年度より村独自でSSWを配置している。SSW担当者には、不登校傾向の生徒と向き合ってもらい、生徒の意向を十分尊重した取組にしていきたい。また、通級指導では点在する学校に担当者が訪問したり村独自で言語聴覚士の派遣を行ったりして、児童生徒に寄り添った取組を行っている。以上が今年度の3つの重要施策である。

本村は、昨年9月の台風14号災害からの復旧が最優先である。その中で、子どもの安全安心を確保するために、村民一丸となって取り組んでいる。道路等の完全復旧までには、もう少しかかるようだが、子どもの教育に遅れが出ないよう学校・地域・村教委が連携して、しっかりと「新たな椎葉村型の教育」を進めていきたい。

「小規模校ならではの教育」

日南市立酒谷小学校 松浦 秀樹

校長として酒谷小学校に赴任し、2年目。「夢をもち かがやき たくましく生き抜く子ども」を目指し、日々学校経営に臨んでいる。本校の最重要課題は、児童数の減少である。

ここ30年の推移を見ると、100名以上いた児童数が地域の高齢化に合わせて年々減少し、昨年度は全校児童数が3名となった。平成28年度に特認校になり、日南市の全ての校区から転入学できるようになったもののアピール不足もあり、ほとんど転入学してくる児童はいなかった。令和4年度の市のPTA研究大会で発表する機会をいただき、酒谷小のよさや特認校制度についてPTA会長が発表したところ、思いのほか反響があり、最終的には校区外から4名の児童が転入学してきた。現在、全校児童数は8名となり、活気のある学校生活を送っている。このことは酒谷地区では大きな話題となり、地域の方々も大変喜んでいる。

さて、8名の子どもたちと先生方との日々の学校

生活は、教育の原点を見るようである。「自分をいっぱい見てほしい。」「もっとたくさんほめてほしい。」という願いをもつ子どもたち。その願いを叶えるために日々子どもたちと真剣に向き合う先生方。そのような生活を送る中で、「いろいろなことを知り、勉強することは楽しい。」と目を輝かせながら学習し、自信を付けていく子どもたちを見ると、「一人一人を大切にすることの大切さが実感できる。

また、下校するとき先生と子どもたちが「さようなら。また明日。」と元気に笑顔で言い合う姿は見ていてほほえましい気持ちになる。

今後も地域コミュニティの拠点としての役割を果たしながら、児童が「今日も一日楽しかった。酒谷小で学べてよかった。」と実感できるように、家庭、地域、学校が一体となった酒谷小ならではの教育を展開していきたい。



未来の仕事で通用するのは

串間市立都井小学校 黒木 秀樹

「学問ノススメ」を書いた福沢諭吉の名前や顔は、慶應義塾大学を創設し、一万円札にも印刷されているので知っていた。しかし、この「学問ノススメ」の中に、どんなことが書かれているのかまでは考えたこともなかった。「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」。この一文は学校でも習ったが、それ以上のことは知らなかったし、知ろうとも思わなかった。先輩の校長先生から紹介されたある書物を読み、この書が明治維新の文明開化に際し、全国民の約10%に読まれた大ベストセラーだという事実を知り驚いた。この書物に、どんなことが書かれベストセラーになったのか無性に知りたくなった。早速、本を借り読んでみると、中には人として大切な生き方や考え方が多く書かれていた。例えば、古代中国の荀子（じゅんし）が説いている一節が書かれている。「冥冥（めいめい）の志なき者は昭昭（しょうしょう）の明なく 昏昏（こんこん）のことなき者は赫赫（かくかく）の功なし」。この意味は、

「志をもって目に見えない努力し、積み重ねない者に、素晴らしいことが訪れるはずはない。また、目につかないところで手を抜く者に、輝かしい成果が上がるはずはない。」という意味である。2300年も前に説かれた話だが、違和感なく今に通用している。きっと明治維新の頃にこれを読んだ人々も、書かれている説や話に共感を覚え、この本をベストセラーにまで押し上げたに違いない。

今、学校教育はICTの導入や生成AIの普及により大きく様変わりしようとしている。10年後、現在の職業の約49%がAIに取って代わられるとのニュースも流れている。しかし、2000年以上経っても変わらない人としての大切な生き方や考え方は、新たに生まれてくる仕事でもきっと通用するに違いない。未来を担う子供たちへ、そんな大切な生き方や考え方を、教育に携わるものとして少しでも伝え、未来へ繋げていきたいと思う。



振り返ってみると

西都市立三財小中学校 柳 田 益 宏

本年度で、中学校社会科教員として新規に採用されて35年を迎え、役職定年の年である。そこで、教員としてのこれまで辿ってきた道を振り返ってみたいと思う。

私の教員としてのスタートは、私立高校から始まった。私の父は、小学校、母は中学校の教員であったので、家の中に小・中・高の教員がいることになり内心面白かった。そんな中、急遽、私は夏休み明けの2学期から1学級54名の学級担任をすることになった。授業料の滞納者への対応、問題行動による退学者への対応など諸々経験させていただいた。その後、県立高校、宮崎市内の中学校の講師を経て、幸いにも採用試験にパスすることができた。高校から中学校の教師に初めて携わる時には、「今の中学生は何に興味があり、どんなことを面白いと思うのだろう。」というところから始まった。それは、子どもたちと接しながら解決していった。ある

日、私の車に同乗していた父に、ふと思いついたように聞いてみた。「お父さん、教師として一番大事なものは何だろう。」と、すると即答で返ってきた答えは「情熱だ。教育に対する情熱が無くなったら教師は辞めなきゃいかん。」この言葉は、私の教員人生の礎となった。

初任校の日向市内の中学校に勤務後、宮崎市内の中学校に異動して事務局試験を受け、埋蔵文化財センター、県派遣社会教育主事として西郷村教育委員会、県教育研修センター、えびの市教育委員会、宮崎教育事務所・中部教育事務所に勤め、15年ぶりに教育現場に戻り、教頭職9年、校長職4年目となった。一つの職場に長くて4年、短くて2年というサイクルであった。職も8つ拝命した。それぞれの職場で気を付けていたことは、上司や同僚の信頼を得ることであった。これからの人生も情熱と信頼を得ながら生きていきたいものだ。

支 会 だ り

< 日 南 支 会 >

日南市立吾田東小学校 平 山 十 四 郎

日南市では、明治時代を代表する外交官「小村寿太郎」の命日を「振徳教育の日」とし、各学校でふるさと日南を学ぶ学習を展開するなど“人づくりこそがまちづくり”という考えのもと、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた子どもの育成に取り組んでいる。

本支会は、小学校15校、中学校9校、計24校（小中一貫校3校を含む）で構成されている。

本支会の目的は、「日南市立小中学校の校長相互の連絡調整を図り、円滑な学校運営及び特色ある学校づくりを推進するとともに、研究活動を通して、校長として識見と資質の向上を図る。」として、年間7回の定例会を実施している。

会では、前半に小中合同の全体会、後半は小中別の研修会を行っている。小中別の研修会では、小中一貫校の校長は中学校部会に入り、さらに串間市立串間中学校の校長も参加している。会場は、日南市

の生涯学習センター等である。

本年度は、11名の転入者が加わり、経験豊富なベテランから、フレッシュな校長まで合計21名でスタートした。

毎回、県校長会理事会報告として、会長から国や県の教育に関する動向等の話があり、その後に各専門委員会の報告、そして、ぎっくばらんな小中別の研修会が行われ、学校運営上の課題解決の一助となっている。

「光陰矢のごとし」。校長としての日々は瞬時に過ぎていくとともに、学校の抱える課題は多岐にわたる。そのような日々において本会では、悩みを語り合ったり、課題について議論したり、情報を共有し合ったりしながら、校長間の連携を更に深めていきたい。



< 串間支会 >

串間市立秋山小学校 仲 衛 慎 一

串間支会は、小学校9校と中学校1校の計10校である。中学校は、串間中1校であるため、串間中の校長は、日南支会の校長会にも参加するなど、2つの支会を股にかけての校長会活動である。また、串間支会校長会では市内唯一の県立高校である福島高校も加わって小中高一貫教育を推進しており、それを推進するための企画委員会も校長会連絡会の中で行われている。

昨年度末に、これまでの小中高一貫教育の取組の成果を実感した出来事があった。2月に本校で学習発表会を実施した時のことである。本校は、小中高一貫教育の取組の一つとして、運動会で福島高校のダンス部にダンスを披露してもらったり、学習発表会で胡桃太鼓部に演奏してもらったりしている。私が赴任してからは、コロナの影響でなかなか来ることができなかった。しかし、やっとコロナが下火になったことから福島高校の校長先生にお願いして、学習発表会で胡桃太鼓部に演奏をもらう

ことができた。私としては、演奏してもらえただけで十分だったのだが、演奏後も生徒やその保護者、部顧問の先生が客席に座って、本校の児童の発表を最後まで観てくださったのである。全校児童7名の極小規模校の学習発表会での一コマ、小さな出来事であるが、私にとっては、これまでの小中高一貫教育の継続的な取組や積み重ねによってできた三校種間のつながりを実感した大きな出来事であった。

串間支会は、今年度から大平小学校が休校となり、10校になった。しかし、少ないからこそまとまりがあり、いろいろなことが相談しやすい支会でもある。これからも「串間の教育は福島高校で完結する」のスローガンのもと、福島高校も含めた11校ががっちりスクラムを組み、少数精鋭の機動力をフルに生かして活動していきたいと考えている。



< 西都支会 >

西都市立妻南小学校 金 丸 昭

西都支会は、西都市11校（3校が小中一貫校）、西米良村2校の13小中学校で構成されている。本年度は、そのうち10校で校長の異動があり、雰囲気も一新したところである。

また、西都市では、令和8年度に中学校の統合が決まっており、今年度からは、開校に向けて、校章、校歌、教育課程、制服、スクールバス、部活動等々の具体的な教育活動に直結する各種部会も動き出し、「西都中学校」としてスタートする準備を鋭意進めているところである。

年間の校長会研修会は、西都市単独で9回、西米良村との合同で2回、計11回の研修を実施し、本支会の教育的課題や情報共有等を行うこととしている。

ここ数年は、西米良村が先進的に進めてきたICT教育の実践を合同研修会で共有し、西都市内の小中学校でも積極的にICT推進に向けた取組を進めており、授業改善並びに働き方改革の重要なツールとしての実践がなされている。

妻高等学校との連携も特色があり、西都市内小中学校の校長会へ、毎回、妻校の校長も参加し、学校の実態や特色ある教育活動の紹介、さらには、小中高の12年間を見通した総合的な学習の時間（「さいと学」）の在り方について連携と一貫を模索した探究学習について共有化を図っている。

西都市も西米良村も「学校を核とした地域づくり」を目指し、さまざまな学びを通して地域を愛し、地域に誇りをもつ児童生徒の育成を進めている。そして、社会に開かれた特色ある教育活動を展開し、豊かな人生とよりよい社会を創造できる人材育成を推進していきたいと考えている。

そのためには、支会校長会が組織として一体的に諸課題に向き合い、支え合っているチームとして機能していく必要がある。

今後も、支会内での連携を更に深めるとともに、それぞれの学校を預かる責任者としてリーダーシップを発揮していく一人一人でありたい。

編集後記

令和5年度宮崎県校長会研究大会は、2年ぶりに県下の会員が一堂に会して開催することができました。各分科会の研究発表や全体会の講演は、大変素晴らしい内容で深い感銘を受けました。今後の学校経営に生かしていきたいと思っております。

さて、ここに校長会広報紙222号をお届けいたします。椎葉村教育委員会教育長の柚木和浩様には、御多用の中、特別に御寄稿いただきありがとうございます。また、日南・串間・西都支会の執筆者の皆様、集約・校正に当たってくださいました各支会の広報委員の皆様方にも感謝申し上げます。

今年は、夏休みが明けても気温の高い日が続きました。熱中症対策等に苦慮しながら、体育祭や運動会の準備を進めてこられた学校も多いことと思います。くれぐれも御自愛のほどお祈り申し上げます。